

令和4年(2022) 日蓮聖人銅像建立100年

銅像建立100年。令和4年(2022)を迎えるに当たり、その当時の日蓮宗管長 河合日辰猊下が記された靈感略記を現代風の言葉も交えさせて頂き多くの方に真言宗時代に銅像が建てられる経緯をご紹介させて頂きます。

銅像建立の由来



当時は、明治維新以後の廢仏毀釈の嵐の中で、往年の清澄寺の権威は次第に薄れ經濟的にも斜陽を喰たざるを得ない大正時代のことです。

銅像建立以前の清澄寺の山内には、題目の法鼓は一歩も入ることを許されませんでした。しかし、この日蓮聖人銅像建立の淨業完成の後は、真言宗清澄寺第

三十世玉瀧僧正は、旧慣を一新され、4月27日・28日と10月27日・28日の両聖日を日蓮宗に全山解放されるといふ大度量を示されました。4月は立教開宗会・

(清澄寺改宗秘話より抜粋)
当山はこの改宗につながる大事な銅像建立100年の慶事をお迎えすべく旭が森整備・スロープ工事等を進めております。

執事長

清澄

令和3年3・4月
合併号

発行所
〒299-5505 千葉県鴨川市
清澄322-1
© 清澄寺
TEL 04(7094) 0525番
FAX 04(7094) 0527番
振替 00140-5-55501
印刷所
天津(有)ブラー印刷
送料共1部100円

お知らせ

4月

27日 14:00
立教開宗会
並別當就任奉告式
19:00
報恩唱題行

28日 4:50
開宗曉天法要

5月

27日 19:00
信行会(唱題行)

6月

27日 19:00
信行会(唱題行)

10月は宗祖御会式として日蓮宗管長御親修の大法要が旭が森を中心に行われることになり、周辺一帯の整備が進み、全国から人々がこの山

に雲集し法華の題目が清澄の老杉に木魂して清澄山は一変して活況を呈することとなり、これを契機として改宗へと進み始めたのであります。

きよすみ

『御銅像建設發起靈感略記』

ああ悦ばしい哉、時至り機熟せり。既往の先師らがこの旭が森に立正の誌しを立てんと欲するや久しさまざまな苦勞や困難があり泣を為すのみ

然るに大正八年八月某日 當山虚空藏菩薩、夢となくうつつとなく恍惚の間に日辰に告げて云く。「私は日蓮聖人に授くるに智慧の宝珠を以てした。しかるにこの智慧たるや大覚世尊にもうして諸佛の智慧を授与せり。聖人はこの智慧を以て權實二教を判釈し 権を捨てて實に入ることが出来た。是れ實に時機相應の弘教なり。それは聖人をして此の如くしたものとは私が法華經の法味をなめんと欲するが為なり。そうでなければ何で彼に權を捨てて實に入るの智玉を授けるであろうか。此の故に私が欲する所のものは唯法華經の法味のみ。しかしながら私は此の法味

を受けざること年月有り 故に力を失うて吾が山をたもち守ることが出来なくなつてきてる。願わくは上人來たつて法華經の法味を授與し そして當山を莊嚴し聖人の事蹟を發揚せんことを」とお告げを頂いた。しかしながら耳に在りしかども繁務の故を以て清澄に來詣することが出来ず。今日に至れり しかるに本年五月また靈感あり故を以て本年六月二十九日 河合慈孝 大橋望隆 大塚圭八を供に出発して三十日朝當山に登り 先ず虚空藏菩薩に前約の如く法華經の法味を捧げ 次に妙見堂にお詣りしその後 まさに明星池に臨まんとする時、偶然に一老僧とお会いして旭が森に導いてもらつた。その折になんとも銅像建立の話に及んだ。是れ實に我同判の大塚圭八なる者なり。その老僧は児玉妙開なる者なり。その

もまた河合慈孝 大橋望隆とともに此れに賛同し互い力を合わせ淨業の完成を誓う。此に於いてか児玉妙開この事を當山貫首玉瀧義秀師にはかる。玉瀧師これを聞いて大いなる喜び東京に来て日辰を大塚に訪ねる。しかしながら日辰不在なり故を以て後日を期し清澄山に帰れり。その後、八月三十一日來京して立正護国会樓上に於いて始めて日辰に會う

一目あつて親子兄弟の如し心情甚だ密なり。

そして玉瀧師より日辰に向かい發起者足らんことを求む。日辰も又一大事の故を以て敢えて辭せず。玉瀧師又云く、「日蓮聖人は吾が先師の弟子なり。それは私に於いても甚だ深き法縁なりいかでか之を棄置して可ならんやこの故に日辰管長發起者たるを諾したまわば私は即ち犬馬の労を取ります」と 上來の事由に困つて之を觀れば則ち『日辰は眞の發起者にあらず眞の發起者は 児玉・大塚の如し、然るに此の二人も又眞の發起者にあらず。其の意味合い

とすれば もし虚空藏菩薩恍惚の間に示現して日辰に告げずんば即ち日辰此の山に登らず、若し日辰に登らば即ち児玉・大塚相值うによしなし。故にすべからく此の虚空藏菩薩を以て眞実の發起者となす所以なり。』

南無妙法蓮華經

維時 大正十一年九月十四日 静照院日辰 謹識

大本山妙顯寺住職

大僧正 玉瀧義秀
中僧正 玉瀧義秀
海軍中將 子爵 小笠原長生
海軍中將 左藤鐵太郎
渡邊長男 宮崎庄太郎
大塚圭八

顧問

海軍大將元帥 伯爵 東郷平八郎

日蓮宗管長 大僧正 神保日慈

日蓮聖人銅像 奉安の概況

奉安の概況

現代铸造界の泰斗、須田町廣瀬中佐銅像、明治大学帝尊像製作として有名なる渡辺長男氏の手により一世一代の力作と称せられし日蓮聖人の銅像は海路東京より房州天津に安着し、同町日澄寺境内に仮安置し檀信徒日夜参集して守護に努め其間諸般の準備を整えたるや、八月二十八日河合大僧正は多くの檀信徒に守られて京都より天津に出向同地にて清澄寺山主玉瀧僧正、房州日蓮宗録司本庄瑞量師及日澄寺住職諸師と共に大約の打合せをなし、翌八月二十九日午前四時日澄寺にて一座の法要終ると共に妙法の声太鼓に送られて重量五百貫の大銅像は徐々として清澄寺に向かい壹里二十余丁の曲折せる山路も午後二時には早くも一千五百尺の高所清澄寺境内に到着したり、旭が森山頂に引き上げは明朝之を行う事と天津町長辰野利三郎氏一同に挨拶し、河合大僧正是一山の僧侶と共に客殿に休息せ

る。山腹まで出迎えたる清澄青年団は多大の労力奉仕をなし且明朝まで銅像守護の任に当たりたり。河合大僧正は午後七時玉瀧僧正と共に本堂に於て大法要をなし終つて檀信徒に對して一場の法話を試みらる、感動頗る大なり。翌三十日早天一同は旭が森山頂に旭光を拝し直ちに引き上げに着手し午後三時萬歳の声と妙法の声鼓裡に大銅像は旭が森山頂所定の地に屹然東海に面して立つ、往年の偉傑日蓮聖人目のあたり見るが如し、

檀信徒踴躍歡喜して感涙にむせび遂に一語をも発する能はず、満山寂として只一大偉僧の東海を望んで屹立するを見るのみ。誠に之れ天下の偉観にして千葉県亦ここに一異彩を加わえたりと云うべし

銅像について

此の銅像は前記の如く斯界の巨匠たる渡辺長男氏が苦心惨憺あらゆる材料総ての記録を参考として謹製したるものにして其容貌の如き實に往時の傑僧日蓮を偲ばしむるに足り袈裟衣数珠より草履の末

の考證の結果になれるものにして

旭が森に立つ記念碑は銅像建立由來を叙説し後の人々に示さんと記してあります。参詣者請い願わくはこれを忘ることの無いよう

南無妙法蓮華經

らる。山腹まで出迎えたる清澄青年団は多大の労力奉仕をなし且明朝まで銅像守護の任に当たりたり。河合大僧正は午後七時玉瀧僧正と共に本堂に於て大法要をなし終つて檀信徒に對して一場の法話を試みらる、感動頗る大なり。翌三十日早天一同は旭が森山頂に旭光を拝し直ちに引き上げに着手し午後三時萬歳の声と妙法の声鼓裡に大銅像は旭が森山頂所定の地に屹然東海に面して立つ、往年の偉傑日蓮聖人目のあたり見るが如し、

檀信徒踴躍歡喜して感涙にむせび遂に一語をも発する能はず、満山寂として只一大偉僧の東海を望んで屹立するを見るのみ。誠に之れ天下の偉観にして千葉県亦ここに一異彩を加わえたりと云うべし

奇跡の聖人銅像

建立より越えて二日後の九月一日突如として未曾有の関東大震災が起きました。この房総も最も激震なり當山も此の災難を免れることができず、塔宇の倒損するものは数えるに遑なし

然しながら独り何の瑞祥か建立の聖像のみ直立し平然として合掌し大洋洋上を望むなり。

旭が森に立つ記念碑は銅像建立由來を叙説し後の人々に示さんと記してあります。参詣者請い願わくはこれを忘ることの無いよう

工事現況報告



中腹付近より題目橋を望む



スロープ登り口付近